

宇野少将 出身が艦長を務めた旗艦

かつて日本海軍の象徴だった戦艦「長門」。唯一終戦まで生き残った最後の日本戦艦です。戦後、米国による核実験の実験艦となり、強度を誇示した後、人知れず姿を消しました。

長門



【宇野積蔵少将】幼ころ活発で体格が良かったという市場出身の宇野少将。市場小、東京中、海軍兵学校を卒業。昭和2年に海軍大佐となり、羽黒・加賀・霧島・長門の艦長を歴任する。昭和8年に海軍少将となり、翌年、海軍砲術学校校長に就任。昭和17年1月25日、海軍砲術学校卒業式の式場で倒れ死去、享年52歳。

戦

時中の国民にとって日本海軍を代表する戦艦といえは「長門」でした。福智町市場出身の宇野積蔵少将(当時大佐)が、昭和7年12月からおよそ1年間、第15代艦長を務めた戦艦です。戦後有名になった「大和」は、存在そのものが極秘だったこともあり、戦中は「長門」が連合艦隊を代表する戦艦として国民から親しまれました。

「長門」は大正9年の竣工当時から世界最大の41cm主砲と高速な機動力を持つ戦艦でした。この時期、16インチ(40.6cm)級の主砲を持つ戦艦は世界で7隻しかなく、こ

開戦と終戦を見届け

太平洋戦争開戦時に連合艦隊司令長官・山本五十六大将が座乗していた「長門」。この艦内から「真珠湾攻撃」を12月8日とする「意味を持つ暗号」ニイタカヤノボレ1208」が発信されます。「長



世界で初めて41cm砲を搭載した長門。竣工当時は最速の戦艦だった。(資料提供/大和ミュージアム)

門」は「大和」に旗艦の座を譲る昭和17年まで、日本海軍の象徴として長く君臨。太平洋戦争を最後まで生き抜き、数ある戦艦の中で長門だけが、被弾してもなお海上に姿を表していました。「長門」は、終戦まで稼働可能な状態で生き残った唯一の日本戦艦でした。こうして太平洋戦争の開戦から終戦までを見届けた「長門」でしたが、戦後米軍に接収され、時代を象徴するかのような最期をむかえます。その場所はマールシャル諸島のビキニ環礁でした。昭和21年、米国の核実験に標的艦として使用された「長門」は、2発の原子爆弾を受け、他国の戦艦が沈むなか浮かび続けますが、4日後、人知れず海中へと姿を消します。日本の戦争も長門の運命も、皮肉なことに、今なお世界を驚かし続ける「核」によって終止符を打たれました。

【長門の最期】

昭和21年の米国核実験には大小いくつもの実験艦が使用されました。7月1日の第1実験(空中爆発)で「長門」はほぼ無傷。7月25日の第2実験(水中爆発)では他国の戦艦が次々と沈むなか「長門」はやや傾きながらも健在でした。しかし4日後の朝、海面にその姿はありませんでした。夜中から未明にかけての間、だれに見られることもなく沈没した「長門」は、26年の数奇な運命を終えました。長門が2度被爆したことは、後まで沈まなかったことも、当時日本では「長門が名艦たる証拠」「日本の造船技術の証明」と宣伝されました。



かつての旗艦、長門(資料提供/大和ミュージアム)

人生を変えた戦争、未だ訪れない心の終戦

終戦を過ぎてもお心の傷が消えることはありません。戦争で抱え、胸にとどめた記憶を語っていただきました。

あまりにも多くの人が死にすぎた

桑野武平さん(金田)

【戦】地のビルマ(現ミャンマー)に着いたとたん最前線まで戦でした。昭和19年以降は消耗戦でやられっぱなしです。米軍と日本軍では兵器の差が歴然とした。戦場では敵を殺さないとい

感覚ではありません。「今日こそは危ないぞ」と毎日思いました。戦闘中に左ひざを撃たれたわたしは、象に乗せられて後方にさがりました。麻酔無しでハサミで切

には「もしもの時はそれで死ね」と手榴弾を一発与えられていました。帰国して金田駅に着いたときは本当に懐かしかった。部隊がほぼ全滅だったので、実家ではわたしの葬式が済んでいました。戦地では多くの戦友が家族の名を呼びながら死んでいきました。生きて帰れると思わなかつたから、生還した喜びよりも、戦友を失った悲しみのほうが

強かったです。あまりにも多くの人が死にすぎました。祖国を守るために死んでいった彼らの思いを無駄にしないために、次世代の人たちに今の平和をしつかり引き継いで欲しいと思います。



誤報で桑野武平さんが供養された町葬

【わ】たしが19歳のころ、昭和13年に2歳年上の夫(定夫)と結婚しました。直後に夫は出征し、2年後に帰国。その後、わたしは生後半年になる娘を亡くしました。2人で悲しみに暮れましたが、幸いにも新しい命を授かることができました。しかし、もうすぐ子どもの顔が見られるという出産の数か月

写真を見て眺めていると、ひたすら夫の無事を祈り、飲み子の息子を帰りを待ちました。昭和20年8月15日、ラジオの玉音放送で知った敗戦は、言葉になりませんでした。その時も「夫は必ず帰ってくる」と信じていました。終戦から3か月過ぎたころ、木森君は



新婚時の木森さん夫妻

もう帰ってこないよ」と夫の戦友に言われました。それでもまだ夫のことをあきらめきれませんでした。「川に沈んで亡くなった」と聞いたとき、夫がおぼれたことを思うと苦しくて、魚が食べられなくなりました。そして、何年待っても、ついに夫が帰ってくることはありませんでした。わたしは主人を供養するために再婚しました。いまでもあの

人を思い出しますし、魚も食べられません。「もつと早く戦争をやめていれば、死なずにすんだかもしれな

いまでもあの人を思い出します

木森ハル子さん(伊方)

